精神科病院において壮年期患者が退院と向き合えない要因を探る

医療法人社団　五稜会病院
○長岡美由紀　安藤留美　和田加奈子　新山浩太
鈴木大輔　土屋由美子　中島公博

研究目的と研究方法

壮年期うつ病の男性で精神症状の改善はみられていたがスムーズな退院へは繋がらなかったケースを経験した。精神科開放病棟においては同じようなケースが多い印象があるため今回のケースを振り返り、退院へ繋がらない要因を探りたいと考え研究した。

研究デザイン：事例検討
研究対象：４０代男性　双極性感情障害
データ収集方法：看護記録、診療録などから本人の情報を抽出し、以下の３点の視点からまとめた
①患者を取り巻く環境②患者自身の要因③看護師側の要因
倫理的配慮：院内倫理委員会で承認を得た

事例紹介

- A氏　４０代男性・双極性感情障害
- 精神科開放病棟に１年２か月間入院
- 妻・息子と同居。息子は不登校、妻からは入院前に別居を切り出されている。父は厳格で、本人との関係性は不良
- 職場は父の紹介により就職している
- 転勤・単身赴任を機にイライラ、乱費、頭がモヤモヤする、思考停止などの症状が出現する

退院までの流れ

職場を休職し入院。

⇓

家族と不仲ながらも入院４か月目で初外泊。以降月に１～２回のペースで外泊。

⇓

復職に関しては希望が二転三転する。退職して専業主夫になりたい希望も聞かれる。

⇓

家族・職場と話し合いの末、退職し障害年金を受けながら自宅療養、DC通所となり退院。

結果①「患者を取り巻く環境」

- 職場は父親の紹介であり、職場には父の部下がいる
- 一時的な転勤と聞かされ転勤・単身赴任するがのちに永続的な転勤であると知る
- 仕事内容が以前と異なりストレスが生じていた。以前出来ていた仕事もできなくなり、冷たい視線を浴びていると感じていた

⇒職場でネガティブな体験がある。

- 外泊時の状況での評価が本人・家族では異なる　本人：よかった。　妻：活動性が低い　低評価
- 妻との会話ツールは主にLINEであり、口頭での会話はあまりない　妻は本人の病状に対する理解は示さず
- 両親からは入院中に勘当され、それ以降交流はない

⇒家族との関係性の希薄さがうかがえる。

結果②「患者自身の要因」

- 外泊状況や復職について声かけすると視線をそらす、緊張、貧乏ゆすりなどが生じ、問いかけが多くなると無言になる
- 医療者には言語的な表出が少ない
- 「好きな事ならできるが違う事は出来れば他の人にやって欲しいと思う」と話す
- 入院前に妻に離婚を切り出されると大量服薬
- 心理検査の結果　極度な抑うつ症状は見られず
- 自覚症状：「低め安定」と話す　他覚的には、若い他患者と笑顔で交流

⇒問題解決の手法がとれず、現実的対処能力が低い
⇒積極的な問題解決が苦手な傾向がある

結果③
「看護師側の要因」

- 気分の確認には、低め安定とのみ返答を受けることが多く会話が続かない
- 復職復帰プログラムへの参加意志については曖昧な返答が多く進展できず
- 看護師からの問いかけが多くなると無言になることが多く、会話は短時間で終了する傾向
- 外泊状況や家族関係を確認しても、詳細な話は少なかった
- 家族への積極的な介入は少なかった

⇒本人の真意が図りづらく、行動を見守ることが多かった
⇒本人・家族を含め積極的な介入が少なかった

考察

まとめ

- 退院困難の背景には、本人の病状だけではなく、環境的な要因や患者の特性などが絡み合っている。
- 本人からの表出が少なく表面上症状が安定している患者は、背景にある問題が表面化しづらく、介入が不十分になりやすい。
- 早期から患者をとりまく環境や患者の特性をアセスメントし、問題を把握することが円滑な退院支援につながる。